

はみ出し者のさすらい

——新たな“家族”へのいざない——

村井五郎

(夜迷亭住人)

〈夜迷亭——自由な空間〉

東京の荻窪に「夜迷亭」と呼ばれる一軒の「家」がある。そこは、新しい「家族」が住んでいる家である。親という名の権威に反抗し、自からの日常的基盤をも破壊してしまつた若い「はみだし者」達の家である。

今年の一月の開所式以来、数多くの仲間がこの家に入りました。職業、主義、哲学等の全く異なる連中が、住みついたり、どこかへ流れ去つたりしてこの家にかかわつて来た。ここには共通理念はなく、また束縛される何ものもなく、一切は自己の主体的判断にまかされる。従つて、ここに自由に形成された全く訳のわからない流動的な集団が生まれたのである。

一月、二月のまだ寒い頃、それは夜迷亭の

「冬ごもり」の時期であつた。現実社会の風が戸口を混沌と叩く中で、こたつやストーブを囲んで談笑や酒乱の日々が続いた。

私達の目前には、もはや抵抗力を失なつて朽ち果てようとする理性や観念があつた。一方で、傷つき疲れ果てた者のつぶやきが重苦しく充満した時でも、他方では、ただひたすら黙りこくつている「流れ者」の心には、何かうめきにも似た生への欲求がうずまいていたりした。

それぞれが己の内にじつと聞き耳をたて、何かが芽生えて来るのを待っていた。私達は今まであまりにも動きまわり過ぎた。怠惰だ倦怠だ何とでも言われてもよい。今はじつと耐えて己を見つめよう。夜迷亭の状況にどっぷりとつかつてみよう。春になればその内動き出すさ……。

春爛漫の三月下旬、夜迷亭は発情期を迎えた。そここに甘いささやきが聞かれ、たちまち数組のカップルが誕生し、暗黙の内に周囲の承認を得た。乗り遅れたというか、取り逃がしたというか、私などはベット・インして何やら悦楽に興じているのを横目に、いや脇目もふらず読書に励んだのであつた。

その頃、「赤色エレジー」がはやりだし、せつなくも悲しいその唄は夜迷亭の愛唱歌となつた。酒を飲んだ時など、誰唄うともなくいつしか涙声の合唱となり、それは夜迷亭の雰囲気奇妙に調和した。

何か変化が起こつていった。目には見えないが確実に何かが進行していった。何かがもどかしく体内から噴出しようとしていた。今まで内へ内へと向けていたベクトルが、外部へとゆつくりと反転を始めたのである。

「こんな所ではもうだめなんだ。」と言つて飛び出してしまつた者もいた。意識が凍りついたまま冬眠し続ける者もいた。だが、大半の目覚めたばかりの飢えた意識達は、その触手を外部へと伸ばしゲテモノ喰いを始めたのである。いろいろなサークル・団体との交流が芽生え人の出入りは一段と激しくなつた。部屋の壁は数多くの情報を知らせるビラであふれた。それぞれが何かを見つけて動き出したのである。

さて、これからこの夜迷亭が、どんな経過でできてきたか、少しさかのぼつてこれまでの動きを追つてみよう。

〈新自然の創造を〉

七〇年一〇月一七日——ヤマギシズム青年祭——練馬産業会館において「全人幸福のための新自然の創造を」というスローガンのもと大研鑽会が開催され、三百人余りの参加者で会場は埋めつくされた。その時の基調報告を一部紹介しよう。

「私達は自然との調和の中から、他の生物との共存関係の中で生き続けてきたと言えると思つた。このバランスを崩したところから自然の調和は崩れ、人間自身の存在も危機

に追い込まれるのです。……そこで私達は新しい価値観の創造が、今、必要とされていると思つた。それを「新自然の創造」と名付けた訳です。

それは原始に戻るといふ意味での自然ではなく、人間の行為と自然との調和を生み出すという意味で使われ、現在を起点とし、前方に眼を向け、良いものを取り入れて共に繁栄したいと考えます。

自然はそれ自体生命を豊かに押し上げ、共に生き、真に人間を活かし活かされるものだと思うのです。その自然の上に人間の知恵を加えていく方向に、新自然の意味をこめてい「るのです」。

私が山岸会東京本部にかかり出したのが七〇年の六月頃、当時、私達は青年祭の準備を進めていた。そこで何回か討論をかきねていくうちに、「公害」に象徴される「都市」の病的状況を根本的に解決するために、私達はどう対処すべきなのかという課題につきあつた。私達はその課題を青年祭につづけてみたのだが、それだけでは大した成果は得られなかつた。

「新自然の創造」、それは私達のおちいっている現状への警告であり、徹底して追求



していかねばならないテーマとなった。私達は模索のうちに次から次へと行動提起し実践していった。新宿の路上で、水俣集会で、三里塚で、人間と大地のまつりで、キャラバン隊をつくって……。

私は「新自然の創造」とは、「人間関係」を変えていく事であると考えた。個々の絆が分断された「都市」において、それをいかに復権するか。それはまず、人と人が交流していく事から始めなければならぬ。環境を整備し機構を改善したところで、人間の意識が変わらない限り、公害等はなくならない。山岸会東京支部を中心とする私達の運動によって、人と人との交流は活発になってきた。交流することは人間関係変革への一つの足がかりとなると考えたのだ。

へさすらいのどぶねずみ一族

どうすれば人間関係をダイナミックに変革する事が出来るのか。私は人間関係のもっと奥深くに「交流」という段階では素通りしてしまう何かがあるのではないかと考えた。私達が主義・主張を越えて強くつながる事が出来る存在基盤は何だろう。それは「自然との調和」のではないか。それこそ人間の根源

的な「原点」とでも呼べるものだろう。

だが、原点なるものに立脚して生きる事はむずかしい。おそらく主義・主張にこだわっていたのでは、原点に近づく事は不可能だろう。まして、その原点に立とうというのであるなら、現在の自分の立場や社会からまつわりついたもの一切を否定する事、つまり捨てる事から始めなければならない。

私は支部運動をやってきた数人の仲間と共に、七一年四月、「へさすらいのどぶねずみ一族」を結成した。「へさすらい」の繁殖力、生命力にひかれて、そう名づけたのである。

「一つの集団が追求し解決を計ろうとする問題は、そのみではとどまる事はなく、あらゆる問題に関連し総合的に解決されねばならない。そこにおいて最も有効な方法は、各サークル・運動体が連合する事である。……集団は集団の枠を超えなければならない、右翼も左翼もないのだ。今必要な事は各サークル・運動体が相互に交流していく事である。相互の交流によって問題意識を拡大し、全人共通の問題意識という鉅脈を探しあてなければならない。個が個としての、集団が集団としての枠を超えようとするなら人間関係は変わらざるを得ない。……我々は人間としての生

を防げる何物かに対し、その実体をあばき、鋭く掘下げて分析、追求し、それへの闘いを確立する。各運動集団は一つの細胞として活かされ、全人共通の問題意識としての一つの運動体としなければならない。——へさすらいのどぶねずみ一族結成宣言文より」

「へさすらいのどぶねずみ一族」の運動は新しい「家族」を造る運動である。それは、交流の果てにつながり得る新しい絆をめざした。新しい家族とは、主義・主張・年代等を一切無視して、次から次と横に拡がっていくという流動的な関係である。仲間を増やしていくという運動であり、「仲よく」なっていく運動であった。

だが、同時に、それだけでは「つながりの弱さ」が歴然としてあった。それは「どぶねずみ」自身が流動的であって、「つながりの弱さ」を克服していく「空間」を持っていなかったということが原因になっているようだった。従って、関係を変え、原点に迫まる迫力やエネルギーを私達は十分に引き出す事が出来なかった。

へさすらいのどぶねずみ一族との出会い

私は、七一年一月に東京郊外の砂川で発足

した、土方仕事をしつつ共同生活する「土方コミュニティ」に異質の人間関係を視た。「土方コミュニティ」についてはくどくど述べるよりもそれを象徴する一編の詩があるので紹介しよう。

それはセズリ布団で夜は明けた
太陽の下で汗とホコリにまみれた筋肉が
夕げと共にたき火を恋し
焼チュウ飲んで我を殺し
焼チュウ飲んで我を吐いた

ロマンチストの強者共は
歌い踊り四つに組んでなぐり合い
インテリまがいの土方野郎は
夜空を焦がす炎に吠えつき
大地を叩いて男泣きした

中山はビールを流して足を洗い
元村は前を向いてバックした
山崎は中山に迫られ情泣き
井手はニッテイとかに酒泣きし
高野橋はセズリかかねば将棋をかけた
浦上は腹ワタグラグラビールピンを喰い
青木の鐘が鳴り始め

長野は仏の前で結ばれて

佐藤はふられてドロップす

ここから何が芽生えてくるかは

離れて視なけりや解からない

ガキ大将の集まりだった

ガキ大将は何処へ行く

(不明) 来る迄

どこかの片隅で情で杖つき

自己をこらえる事より

道はなし

情多くして共同体あり

情多くして人も生き

情無用で世は移る

「土方コミュニティ」は七一年五月に解散した。この詩は一貫して「土方コミュニティ」を支えて来た男の思いをつづったものである。そこには生き生きとした関係があった。切っても切れない強い絆が出来ていた。主義・主張の異なる連中が毎日顔をつき合わせ、同じ釜の飯を喰い、共に働き生活して来たという強

みというか、一線をこえて肌で感じ合えた者

同志が到達し得るすがすがしさがあつた。人間関係を醸成する「空間」としての「土方コミュニティ」の果たした役割りは大きかった。私は「どぶねずみ」の発想と「土方コミュニティ」の経験との結合を考えた。つまり、一方で前衛として外部で流動的に仲間を増やしていく、同時に後衛として根拠地としての「空間」をつくり出し、そこで深い人間関係を醸成していくというものである。

はつきりしたイメージはなかったが、とにかく東京に「根拠地」のようなものを造ってみようという数人の仲間が九月に第一の集まりを持ったのである。そこでは、さまざまなイメージが出された。「組織的な所属をあまり意識せず交流出来る場所が欲しい」

「社会からの脱着装置を造り、国内逃亡装置を造る」、「ふるさとを創ろう」、「どんなサークル・団体でも利用出来る総合的な情報センターと事務所を造ろう」、「流れ者の宿」、「解放の家」……

その後何回か会合を開き、話は具体化していった。延何十人かの仲間達が土方をやって、十二月頃には資金もたまり、七二年一月一日、荻窪に家を一軒借りたのである。こうして「夜迷亭」は発足した。

「ガキ」の時代に帰ろう

家の維持は「出したい者が金を出す」という事で現在までに至っている。個々にいくらいくらと金額を決める訳ではなく、家賃・光熱費・食料等一切の会計の責任は全員にまかされて来た。夜迷亭では一定の職種はなく、それぞれが土方やバイトをやつて金をかせいでいる。

私は、夜迷亭は「ガキ」の集まる場であると思つている。私達は少年時代、近所のガキ共と空地などに集つて来ては徒党を組み、喧嘩をし、暴れ廻つた共通の体験があるはずである。その中では、自由に集団が形成されたり、ガキ仲間の自治が行なわれたりして、さまざまな試みがなされた。それらは遊びでありゲームであつた。私達の成長過程で、そういう「ガキの時代」の経験は必要だつた。そうやつてワイワイギャアギャアやつて来た中から、夢や理想や才能等が芽生えてきて、やがてそれぞれの道を歩むようになるのだ。

われらはみ出し者達は「ガキ」である。既成の枠から自らはみ出して「……もう、いままさら帰るのはいやだ」と駄々をこねている「ガキ」ともいえる。と同時に、はみ出し者

達は弱い人間である。どこのグループやセクトでもやり切る事が出来なくてさまよつていく脱落者でもある。

はみ出した者にとつて、ある期間なくさめ合うのも、ガキの時代に帰つて自分や他人を見つめてみるのも必要なのだ。また、お互いに「何か」を見つつけ合い、その芽をのばし合えるようなガキ仲間のような関係が必要なのではないか。

そして、自己の可能性である「何か」を見つけたら、夜迷亭を飛び出せばよい。日本中にこんな「やさしい」場所はないであろう。だが半面こんなつまらなくて、くだらない場所はないともいえる。いつまでもこんな所にいたら、お互いに腐つてしまふ。

「一人ぼっちが好きだ」なんて言う人がいるが、実はそんなことは簡単にいえないことである。「孤独」とは好き嫌いというような安易なものではなく、強い主体性の表現なのだ。人は関係の中に生きていく。不必要な人間等一人もいない。それぞれが何らかの役割りを果たして関係は成り立っている。「孤独」とは、己の立場が関係の中の何たるかを真に自覚した者のみが決意表明として吐く言葉なのである。



者も何人もいる。外に向かおうとしているエネルギーを、夜迷亭でストップさせてはいけない。何か突破口が必要なのである。

「新たな根拠地づくり」

瀬戸内海に「立島」と呼ばれる離れ島がある。この七月から私達はそこでワークキャンプを計画している。夜迷亭での限界をそこにあぶつて突破口をつくろう、徹底的に心底やりたい事をやつてみようというのである。

既に何人かが現地におもむいて準備をしている。東京では、キャラバン隊を編成し各地でオルグしながら立島にだれだれもという計画が進められている。「やるぞ」という

のろしは、東京、厚木、名古屋、大阪、神戸、豊里に上がった。「新しい家族」を造ろう、「村」を造ろう、「国」を造ろうと、各地で思い思いに準備を進めている。

島には畑も、水も、魚も、きれいな空気も、電話もある。自給自足出来る生活諸条件は全てそろつている。私達はそこにユートピアを造ろうというのではない。新しい根拠地を造ろうというのだ。昔、瀬戸内海に君臨した海賊のように、立島を拠点として島から島を、四国を、九州を、本州を開拓して廻らうというのである。

現在、〈東京―夜迷亭―立島〉という一つの流れが形成されつつある。夜迷亭はさながら東京の「脱落装置」であろうか。それはあなたを誘惑するであろう。「会社を学校をやめて墮落せよ」と。是非とも誘いにのつて頂きたい。夜迷亭であなたは今までと違った自分を発見するであろう。それから、あなたを、あなたの青春を徹底的に投企する場・新天地立島にご招待しよう。

夜迷亭はこれから立島への案内所役割りをも果たすことにもなるであろう。勿論、今まで通り、流れ者の宿・情報センター・集団生活の実践と訓練の場としても存在するであ

夜迷亭は「新しい小社会」であり、単に「現実社会」の縮図であつてはならない。夜迷亭は「開放区」には違いない。だが、自由に形成された集団といえども「集団性の枠内」というある程度の「閉鎖性」は保持していかなければ、「現実社会」と対峙した「空間」を造つていく事は無理だ。集団の質の変革をめざすなら、当然、集団を構成する個と個の関係の修養が必要になり、集団の中である期間定着して自己を訓練していく必要がある。

始終出たり入つたりしてれば常に新鮮であるかも知れないが、そこに残るのは交流して「知り合い」が増えまじつたというだけの事である。私達は「新たな日常性」を創りあげなければならぬ。それは私自身の今後の課題でもある。

夜迷亭は都市のコミュニケーションとしての機能を十分持つている。だが、私にとってコミュニケーションは目的ではない。それはあくまで過渡的な一段階である。それは私達の成長過程として次なる文化への発展に転化する場であつて欲しい。

夜迷亭は規模が小さい。やりたい事があつても周囲の状況から制約されて思うにまかせない。現に夜迷亭からはみ出しがつかつてい

ろうが。

「人間関係を変えるんだ」と呪文のようにつぶやいていた時代があつた。その言葉は青年祭以後ずっと私につきまとい、今も私を捉えて離さない。

暗中模索の内に「夜迷亭」が生まれた。そして今、何が私を「立島」へと駆り立てる。夜迷亭は「地域」を変え得るか、立島は「根拠地」となり得るか、それらは真に「人間関係」を変え得るか、答えは一〇〇年経つてもわからないだろう。私のやっている事は正しいのかどうか、それは経験が少しずつ明らかにしてくれる。

将来、立島はにぎやかになるに違いない。それを契機に、各都道府県に一つづつ夜迷亭が出来ていくであろう。そして立島のような根拠地をいくつも造り、そこで人間を醸成していくのだ。やがては立島からブラジル・イスラエル・アフリカへと夢は果てしない。

私の「人間関係云々」は幼稚な発想かも知れないけれど、カッコよく言うならば、私は失なわれた幻の人間関係を探し求めて、文字通り「さすらいのどぶねずみ」として生きつづけようと思つた。



■特集・さて、どう生きようか——若者の軌跡

虚偽の道ではなく

——ゲマインシャフト的一体感への志向——

西 讓

(JOE一族のコミュニオン)

〈エロスと学生運動〉

月日が流れるのは早い。まさに光陰矢の如しである。無駄に年をとるまいと胆に銘じて来たばかりも、二二の誕生日を迎えた。

ぼくが初めて日本協同体協会のKさんと知り会ったのは、大学三年の時である。それまで、ぼくは三年間ほど、折しも燃えさかっていた大学紛争の渦中に身を投じていた。今から考えると、どれだけ深くかわっていたか疑問が残るが、ともあれ、かなりアナキーなボーイであったにもかかわらず、マルクス・ボーイと共に集会やデモにも参加し、ヤンガー・ゼネレーションひと通りの道をたどって来た。今でも、大学のキャンパスで活動家の勢いの良いアジ演説を耳にする度に、言い知れぬ郷愁を感じる反面、生半可に自分が見棄てて来た何ものかに対する後めたさを感じることもしばしばである。

しかし、過去の道をきっぱりと清算しようとしている今、こうした類のセンチメンタルな回顧趣味は無益であろう。大切なのは、過去の体験を現実の自分に照らし合わせて現在に生かす工夫であろう。

「死んだものはもう帰ってこない。生きて

るものは生きてることしか語らない。」(植谷

雄高「永久革命者の悲哀」)とは、未来(夢・理想の意)の宇宙空間の彼方から語りかけて来るこの詩人の言葉であるが、死者の死をいくら嘆いたにせよ、生者にとってはもはや過去の人である以上無益である。死者の死をふまえて無駄にしない行為そのものが大切であるように、感傷を抜いた過去の貴重な体験をぼくは大切にしたい。

六七・六八年……と吹き荒れた新左翼の学生運動とは別の次元で、もう一つの輝かしい動きが胎動しつつあった。それは今日では広く知られているビートニック・ヒッピーやフリークといった文化面で最先端を切っている前衛達である。とくに、『月刊キブツ』の「アメリカ・コミュニオン群像」の特集に出ていた「グループ・マリッジ」の動向は、ぼくには前代未聞の実験として、目を見張らされた。かつては原始共産制の母権制社会で見られたであろう「複合婚」の形をアメリカのある場所で、二二人の男性と二三人の女性と九人の子供が、四つの寝室からなるバンガローと一台のスクール・バスを使って試みているという。彼らは、嫉妬や羨望といった独占欲を含

めたあらゆる所有観念と不健康な執着を断ち切るために、寝食を共にし、コミュニオンをきわめて合理的に運用・持続しているという。

ぼくは、学生運動を通じての政治面でのコミットのみならず、文化・生活面でもこうした自分とはおよそかけ離れた世界に絶えず関心を払っていた。なるほど、大学紛争の過程で出てきた学生自らの手による大学の「自治管理」・「自主講座」の中にも、既にコミュニオンの発想がなかったとはいえない。だが、それとてもエロスの面では「グループ・マリッジ」ほど完全ではなく(否、むしろ活動家としてのつまらぬ政治道徳のためにエロスを抑圧するか黙殺していた)、また、大学当局の要請による権力の介入によってバリケードが取り除かれると、あっけなくつぶされるのが常であった。

一九六八年「五月革命」華やかなりし頃、フランスのソルボンヌ大学の壁はひとつの象徴として「セックスをすればするほど革命をしたくなる。革命をすればするほどセックスをしたくなる。」(「壁は語る」)と落書きされていた。だが、風化した「フリー・セックス」が流行していたとはいえ、長い間封建的な儒教道徳の伝統にはぐくまれて来た日本で

は、そこまで徹底してはいなかった。

〈地についた運動を〉

ところで今、ゲゼルシャフト(営利社会)とゲマインシャフト(血縁共同社会)という区分けをすれば、大学はゲゼルシャフトであり、「自治管理」や「自主講座」はその上に便乗した一時的、便宜的な疑似ゲマインシャフトである。その基盤がゲゼルシャフトである以上、限界は自ずから見えていたわけである。つまり、誤解を恐れずにいえば、外部(ゲゼルシャフト、例えば「会社」など)からの個人的な収入によってバリケードの中で寝食を共にし、ヘルメットをかぶり旗をふっている間だけが一種のゲマインシャフト的な共通の体験をわかち味わえただけで、それはゲマインシャフトとして地についたものではなかった。それぞれの家庭に帰れば、資本体制を末端で支えるごく平凡な家長制の小市民的生活が待ち受けていたのであり、その「家庭」も真のゲマインシャフトではありえなかった。また最大の欠点は、大学自体が産業予備軍を養成するゲゼルシャフトの社会であるために、ゲマインシャフトとしての「自治管理」や「自主講座」が円滑に行えるだけの独自の自立し

た生産点となりえなかつたのであり、このた根拠地としては不適合であつた。

こうしたいくつかの欠点を、政治面からではなく、文化・生活面から補っていたのが、実は先のヒッピー・セネレーションである。

ほか、理屈抜きに何よりも気にいったのは、彼らフリーク達が何ものにもとらわれな自然児であるために、大変楽天的で解放的で人間同志の信頼を貫き、あたかも血を分けあつた兄弟姉妹のように地についた共同生活のなかで和氣あいあいと仲良く暮らしている点だつた。

それは現在、アラブとの臨戦体制にありながら二百五十集団、十万人の人々が住んでいるイスラエルのキブツでも同様であろう。

アラブとの戦闘に於いてイスラエルが不敗であるのは、ユダヤ民族としてイスラエル全土の結束やアラブ諸国間の内部矛盾、内部分裂によるだけではない。一九四八年のイスラエル祖国解放戦争での対シリア戦に於ける初期キブツ「デガニヤ」の活躍にも見られたように、ゲマインシャフトを生活の基盤に置いたキブツが強固で戦闘的だからである。(J・バラツ著「ヨルダン川のほとりの村」第十章参照)

さて、ぼくが「一体感」を実感したのは「手」に話題が及んだ時である。

「どこからどこまでが「手」か」と、まず進行係から尋ねられると、皆は考え込んでしまった。「(常識的には)手首から下が手です。」と答えた者もあれば、「否、手を上げてください」という場合には、腕を上げるだろう。だから肩から下が手です。」と答える者もいた。そのうち話が中心に煮つまつてきた。「肩から下が「手」だとしても、腕を上げるのは頭脳の働きがあるからだ。だから、脳も手と考えていいのではないか。」

「……そうか。筋肉や血管や骨格があつて始めて「手」独自の働きが出来る。手は手としてそれだけ切り離しても独自の働きが出来るわけではないから、全身を手として考えてもさしつかえないのではなからうか。」

「全身が「手」……。(あ、一体!)」この瞬間、ぼくは理屈や頭脳からではなくまさに全身全霊で「一体感」なるものを直感し体得した。一体の「体」とはからだである。世間の常識からすれば至極当然のことであり、それをわざわざ最も身近なしかも生身の体を手を使って悟らせてくれた所に、ぼくは底知れぬ驚異を感じた。それとともに、ぼくらが

これは、血が血であるが故に血の結合の強みを物語っていると共に、ドラブキンが「もう一つの社会キブツ」の序論で述べているように、比較的平穏な時代につくられた共同体はごく稀で、社会生活の緊急事態や革命的变化のような激しいショックで日常的慣習から脱却しなければならぬ時に初めてコミュニケーションの維持が可能であることも実証している。このことは、フランスでは、普仏戦争終結にともなうテイエル政権の屈辱的な対独講和条約に不満を抱いたパリ民衆が樹立した一八七一年の「パリ・コミューン」や、中国文化革命の初期にみられた「上海コミューン」あるいは不完全ではあるが大学紛争の渦中にみられた「自治管理」などの例が雄弁に物語っている。

ぼくは、先に、かつて学生大衆の手で行われた「自主講座」や「自主管理」は不完全であつたと述べたが、それは今日少なからず、目ざめたグループによって克服されつつあるようである。例えば、大学占拠のバリケードの中から生れた滝田修の「バルチザン五人組」(五人一組の「共同労働団」)や、三里塚や東大闘争を経た六九年の「解放大学」での「開放講座」の活動の中から生れ、現在「自

日常、常識を常識として見落している点が多いにも多くありはしないかと反省してしまつたのである。

一体感への希求は、今日ぼくが最も尊敬し熱愛している大地の思想家、橘孝三郎の思想にもすでに見られる。橘孝三郎は、従来、権藤成郷と共に農本ファシズムとか右翼思想の一つとみなされてきた。だが、むしろ、彼の本質はロシアのナロードニキにも近く、人間を大地自然の宇宙に還元させることによつて権力からの自立を目ざす東洋的無政府農本主義(土着農本思想)のカテゴリーに収まるものである。今いちいち説明する余裕はないが、ともあれ西田天香の「一燈園」や武者小路実篤の「新しき村」にも一脈通ずる「兄弟村農場」(後の「愛郷塾」「愛郷会」)は、その一体感への希求の具体的実現であつた。

桶において天地大自然(「土」)はいわば母なる大地であり、彼の提唱したモデルとしての理想部落とは、天地の大自然の恵み深き懐の中に温く抱擁されつつ、これを少数の人達が耕やすことによつて成り立つものなのである。(松沢哲成著「橘孝三郎—日本ファシズム原始回帰論派」60頁参照) 母なる大地を共に耕やす人々はお互い同じ血を分けた兄弟

力更生」をスローガンに僻地の沖繩本土奥部落(ここは、水津彦雄著「日本のユートピア」にもあるよう)にかつては「共産部落」と呼ばれ、現在でも共同店経営によつて生計を維持している部落でもある。で農耕を中心とした自給自足の生活を営んでいたD.I.C.(共産主義青年団)などである。

「一体感への希求」

ところで、コミューンの発想には「土と血」を媒介とした「一体感」が根づいているが、ぼくが初めてこの「一体感」に気付いたのは三重県春日での「特別講習研鑽会」(略「特講」)を受けてからである。「特講」とは、決して腹を立てぬ人を作るための「話し合い」ならぬ「話し合い」の場で、科学的禅にも似た「寄り合い」の形をとつた一種の合宿生活である。

ぼくはここで予定の一週間をはるかに延長して九日間受講して来た。ぼくが受講した時は、右は故三島由紀夫の主催していた元「桶の会」会員から左は元全共闘まで、ノンポリ(政治的無関心派)を含めて参加していた。元来「特講」は、思想・宗教・信条・身分・性別の別なく話し合える場である。

のような感じを抱き、この時、ともに汗を流しつつ結ばれた一体の心は、母を共通にする子供達即ち同胞の間に流れる感情と大変良く似ている。それはまさに、網沢満昭が述べているように、共同耕作、共同食事、共同居住、共同管理によつて、大地の中に生活し、内なる大地を共通に持つ同胞の間には、「土と血」のつながり、大歓喜があるものなのである。「現代の眼」七二年三月号の網沢満昭「農本主義と人間の探求(下)」参照

今日、従来述べて来た「一体感への希求」(総じて共同体志向)は、ほく同様学園紛争を体験したヤンガー・セネレーションにも積極的な方向ではなく、むしろきわめて消極的な負の方向として受け継がれている。

最近では、作家深沢七郎の経営する「ラブリミール農場」に大学紛争で挫折を経験した若者が多数訪れ、終日農場でクワを握っている姿が見られるという。それは源氏に追われた平家さながら都落ちの落人の末路にも似ている。青年達が挫折感から心の傷を癒し精神の空洞をみたすためにさすらい、ついには世捨て人として「土」に根づいた姿にぼくは古来の稲作民族としての日本人の伝統(「土」回帰)を見る思いがする。ただ、これらの青年達が

婦農(一種のドロップ・アウト)を通して大地にふりおろす鉄の一撃一撃が、自身の世界をも世の中をも着実に変えて行く「世直し」に最終的につながるという点をどれだけ深く認識し、かつ持続しているかはなほ疑問に思うのである。

「売り渡さずに生きる」

さて、今までは紛争体験を踏まえて関心点や批判など意見を述べて来たが、最後に私自身の今後の展望を述べてみたい。

もしも、ぼくがこうした紛争体験に遭遇し、意識の内面化を計らなかつたならば、従来通りスムーズにホワイト・カラー層としてピラミッド(社会機構)にすっぽり収まった「いい子」になっていたに違いない。ただ親泣かせかもしれないが、幸いなことに、「自己否定」や「日常性否定」といった言葉にも代表されるように、眼前に提起された紛争は、多くの内面から虚偽の道をスムーズに歩むことを捨て去ってくれた。だから、ぼくは今そうしたピラミッドの道を進むことを拒否するし、たとえ大学四年間を通じて卒業証書を受け取ったにせよ、それをなにかけてどうこうするつもりは毛頭ない。

如何に「マス・プロ教育」とはいえ、下積みの中・高卒者から見れば、エリートとしての学生が立身出世主義を克服せずして「変革」を叫ぶなどチャンチャラおかしいのである。活動家気取りの学生には、「卒業証書」を眼前につきつけて「踏絵」にしたいと思う。

ぼくは少なくとも、離脱後、活動家気取りと立身出世志向だけはやめておこうと心に誓ったのである。それがまた、紛争で提起された新左翼の考えの真の継承と言えないだろうか。こうした継承を踏まえて具体的にどう生かして行くのが、ぼく自身の切実な課題である。それを今、明らかにしてゆきたい。

まず自分の誇り、人間としての尊厳を如何なる組織にも売り渡さないという基本線を貫きたい。それは、自分にあくまで忠実で潔癖である証であり、何よりもまして人間らしく正しく生き抜く姿勢である。

したがって、近い将来「就職」に際しても営利追求だけを目的とする企業の側にとどまることを拒否する。それはまた、資本の論理からなる国家を拒否する姿勢にも通ずる。

ぼくには、こうした実存の重みを踏まえた個人主義に徹するなかで、その延長上として良き集団主義(ゲマインシャフト的一体感)

を熱望するコミュニケーションの発想が出てくる。このため、国内外を問わずまた伝統や規模の大小を問わずコミュニケーションで生計をたてたいのである。具体的には、イスマエル(キプツ)の土も踏みたいし、またブラジルでの理想郷建設の呼びかけにも応じたい。インドの菩提樹の下での瞑想にも耽りたい。

一匹狼を自認したばかりである。小田実よろしく「何でも見てやれ」の旺盛な精神で日本はもとより世界のすみずみをくまなく歩きまわり、この目で見、肌でじかに感じたい。

現在、ぼくは独自に東京地方を中心とした同期の特講生や知人を中心として『月刊キプツ』亀戸読書会を数人のメンバーと共に企画しているが、共に参加協力される方はほとんど受け入れたので申し込んでほしい。毎週土曜夜から日曜にかけては、府中読書会(ぐらぶ・もぐら)と相互交流をはかりつつ連帯を深めて行く予定である。独自の読書会として当分の間は(1)農本思想の探求、(2)農法、農政の探求、(3)共同体原理の探求、を三本の柱として行きたい。

(連絡先は、江東区亀戸二一六 亀戸団地四二〇六 電話六八二一九九三)

第二回共同体青年交流の会報告

会場・東山産業(香川県)

目に見えぬ交流の輪を

上野 允士

一人で連絡船ののって、瀬戸内をわたるの開始のことだった。高校の修学旅行の時に一度だけ高松へ来たことはあったけれど、それはもうぼくの記憶の底に沈んでいる。

高松からさらに、琴平電鉄の二両連結の電車を乗りついで三〇分ほど走り、平木という小さな駅で下車した。駅までむかえにきてくれた車にのって、東山産業の研修会場であり、今回の「交流の会」の会場となっている「青年の家」に着いたのは、もう夕陽の落ちたあとだった。

近くにある養鶏場のおいがこの会場の付近までただよっていて、養鶏の東山産業に来

たことを感じさせた。この辺の土地は平坦で、遠くに思い出したようにポツンポツンと小山がい山が顔を出していた。

海をわたって四国の東山産業を会場にして、去る五月一〇日から一二日までの三日間、第二回目の「共同体青年交流の会」がひらかれた。「日本の共同体話合いの会」での話し合いのなかから生まれ、日本協同体協会が呼びかけて第一回の会合が行なわれたのは、去年の九月、奈良の大倭紫陽花邑の「交流の家」のことだったから、それからすでに半年以上が経過したことになる。

今回の集まりは、東山産業の藤井章作君が中心となって呼びかけがなされた。藤井君は、

初め研修生として東山に入り、その後奥さんの由里さんと共にここで生活を続けていくことにした。東山産業では外部から定着した唯一人の青年である。ここに参加した共同体と参加者は、東山産業(藤井章作、藤井由里、志渡節雄、安田周二、安田啓三)の他に、大倭紫陽花邑(青山波留茂、反保香須弥)、ぐるうぶ・もぐら(M君)、FIWC東海(石黒茂樹、大倉豊子)、河内農場(植松誠一)、日本協同体協会(岸田恭子、上野允士)、それに東山産業に長期にわたって滞在している山形の朝日産業の鈴木君だった。とはいっても前回同様、ここでは組織を代表して参加し発言するのではなく、「我々」からではなく「私」からの発言がなされていた。このうち第一回の会合へも参加した東山産業の志渡君、藤井君、大倭紫陽花邑の反保さん、青山さんとは久しぶりの再会だった。

会場となった「青年の家」は比較的新しい独立した家屋で、風呂・台所も完備しており、この家の一角で藤井君夫婦と、東山産業同様に全協連の構成協業体の一員である朝日産業の鈴木君が寝泊まりしていた。

ぼくとしては前回の会合にふまえて、これまで訪れるチャンスがなかった東山産業を実

地に一目みておくこと、そして参加して来る共同体の人たちの意見を聞くことに重点をおいて、今回の会合に参加した。

■ 早目の夕食カレーライスを食べたあと、東山産業の若者数名を交えての最初の夜の話し合いは、顔を出してくれた志渡勇一氏を中心に、東山産業についての説明から始まった。

若い連中からは「おやしさん」と呼ばれている志渡さんは、全協連(全国協業経営体連合会)組織の推進者の一人(現在理事長をしている)であり、東山産業を代表して何度か「共同体話し合いの会」にも参加している。

昭和三六年に、志渡氏を中心にして四戸の農家が一体生活を開始してから、すでに一年がたつ。その後、三九年にはさらに三戸を加えて今日に至った東山産業は、山岸会の実顕地として出発し、今日でも無所有一体の生活をめざしていることには変りないが、現在の姿は、山岸会関係の各地の生活体とはかなりの相違を示すに至っている。山岸会の精神を生かしつつも、今日の東山産業がそれとは異った側面を示すことのうちには、共同体に対する志渡さん独自の哲学がひそんでいるといえるだろう。養鶏が中心で、約五〇名の人

も、のんびりとしたくつろいだ空気のなかで進んでいた。

「ぐるうぶ・もぐら」に関しては、先月号の「月刊キブツ」で竜君が詳細に報告してくれているので、ここでは同じ説明をくりかえす無駄は省こうと思う。東京からはるばるとヒッチハイクでやってきたM君の話の聞いて、「もぐら」の共同生活には地味だけれど着実さがあるのを感じさせられた。

■ 同様に、名古屋で都市の中の共同生活をめざしているFIWC東海の生活の仕方、「もぐら」と似かよった点をいくつか備えている。石黒君の報告によると、ここでは今、男性五人、女性二人がアパートを借りての共同生活を行なっているが、仕事は各自がそれぞれ別なところへ通っている。FIWC東海の共同生活の特徴は、精薄児の問題と取り組んでいることにある。差別を彼ら自身の中から撤廃していくために何をしたらいいのか? それ

が彼らの問題であり、いわゆる知恵おくれの子供との共同生活を実現することによって、彼らの運動の質を高めていくことをめざしている。

■ たち(外部からの労働者、学生、研修生を含む)が、毎日の仕事に従事している。

■ 構成員の家庭生活は独立しており、賃金の分配も受ける。(ただし、直接お金を受けとらずにこれを経理が一括して保管し、各人は必要に応じてお金を引き出せる。)

■ 志渡さんは、外部から来てここで働く人になにも東山産業の在り方や思想のすべてに共感せずとも、ある程度の理解があればそれでいいという。人間の日常生活のなかで生じる欲望自体にむけて一直線に切り込んでいくことはむしろ避けて、我々の持つ欠陥や種々の様相をおびた欲望をある程度は満たしていく方向で、ここでの社会作りを行なっている。生産部門を共同化し、住居・食生活等の部分は個別に行なうという形態は、イスラエルのモシヤブに類似したものである。

■ 東山産業に自由な空気を感じたのは、前提の理論にしばられることなく、常に臨機応変に問題を処理していくその考え方の柔軟性によるものではないだろうか? 東山産業も出発時点では共同化が生活のより多くの部分へむけて行なわれていたが、その後、例えば、食事には個人の好みがあるとか、婦人が男性同様に決められた時間労働することは無理

■ めるのかという認識の仕方について議論があったが、ぼくには例えば、石黒君なら石黒君が、なぜ差別の中の精薄問題を選んだのかといった点、彼ら自身が結局どういう関係をめざしているのかという点については、十分に理解できなかったかもしれない。

■ 今回は、ごく限られた人数が集まった「交流の会」だったわけだが、この種の集まりを呼びかけていくことにどんな意味があるのかを考えてみた。「交流」とはなにか? 集まってくることに何か意味をみいだせるのか? この問いに答えるために、ぼく自身にとって第一回目的の「交流の会」が何を意味したか、そこから生まれた関係と得た情報をいかに生かしていくことができたのかをふりかえってみた。自己満足じゃないかと言われるかもしれないが、ぼくにはやはり自分の体を運び、人を通して各種の共同体の存在に触れることによって、より生き生きとした知識を得ることができたと思っているし、その情報を協会での仕事を通して、訪れた人たちに流していくことによって、いくらかでも生かすことができたと考えている。

■ ぼくは、これからもこの種の集まりがひき

■ があるといった点に考慮が払われ、それぞれ

■ ついでに、東山産業の受け入れ制度について触れておきたい。東山産業で生活を体験したい人は、この研修制度のなかで受け入れられる。どの共同体でも、基本的には来る者は拒まずの姿勢を保とうと努力しているが、この制度の特徴は、研修生に賃金を与えるということにある。一日の賃金は、男一三〇〇円、女は一〇〇〇円であり、このうちから「青年の家」での宿泊費(滞在が一日以下の場合)は三〇〇円、一日以上の場合は一五〇円)と、食費が除かれる。

■ 今までのところ、東山産業に研修生として訪れた人の数は多くはないようだった。そのなかでは長く三カ月滞在した人がおり、短いところでは、わずか一日で逃げだしていった人もあるという。共同体に関心のある人、少し体を動かしてみたいと思う人は、ここに出かけていったらいいと思う。

■ 第二日目は、朝から午前中いっぱい、日ざしが夏のように感じられる小さなみかん畑で、草刈りの仕事をした。参加者の数が少なかつたせいか、この午前中の仕事も午後にかけて

■ つづいていけばいいと思っただけだが、会合の在り方は、呼びかけを行なうグループの主体性に全く任せていけばおもしろいのではないだろうか。具体的には、今回参加した「ぐるうぶ・もぐら」が次回「交流の会」を組織することを提案としてこのページを利用して掲げておきたいのだが、その内容については、第一回、第二回のスタイルを考慮に入れる必要はないし、呼びかけの対象もこれまでの例にこだわることなく独自の、その場限りの集まりを組織するつもりで呼びかけてみてはどうかと思う。

■ もちろん、この種の会合の組織化、内容の創り方には、多くの困難がある。会合の役割は漠然としているし、その影響力を目で確かめることもできない。参加者の動機が異なっているという事情もある。目標は、たとえ遠大な理想でなくとも、明確に理解されるものであるべきだろう。

■ とにかく、この場をキッカケとして生まれた関係を媒介として、いろいろな往来が活発となることを希望している。